

「JFAこころのプロジェクト―遠野わらすっこ「夢の教室」始まる」

夢や目標があるから、 どんな困難も乗り越えられる

「サッカー選手になりたい」
「病気を治すお医者さんになりたい」
遠野北小（中浜艶子校長、児童388人）6年1組の児童たちは、夢シートに自分の夢と、実現のために努力すべきことを書き込んだ。みんなの前で自分の夢を発表した児童に、周りのみんなは夢の実現のためにどんな協力ができるのかという意見を出し合った。

この日、児童たちの先生を務めたのは、「やっちゃん先生」こと元Jリーガーの安永聡太郎さんと、「ハワイ先生」こと元サッカー女子日本代表の川上直子さん。二人の先生とともに体育館でチームプレーを学ぶミニゲームを行った後は、やっちゃん先生が教壇に立ち、プロのサッカー選手を夢見てひたむきに頑張った日々や、夢を達成した後に、次の夢や目標を見つけることができなかった挫折の日々を振り返り、夢や目標を持つことの大切さを語り掛けた。

日本サッカー協会（JFA）と本市は9月1日、JFAが取り組むスポーツ選手への派遣授業「こころのプロジェクト」の実施について5年間の事業を締結。今後、市内の全小学校で、夢を持つことの大切さを学ぶ「夢の教室」を実施する。



1川上直子さん(左)、安永聡太郎さん(右)と楽しみながらチームプレーを学んだゲームの時間 2安永さんの授業に聞き入る児童たち 3事業締結式で固い握手を交わすJFAの川淵三郎キャプテン(左から2人目)と本田敏秋市長(左から3人目)ら 4自身の体験を踏まえ、夢について熱く語る安永さん

【特集】 職人の挑戦

5人の大工職人が、
今、愛知県大府市の
かやぶき屋根の改修に
挑んでいる。
伝統の技術を受け継ぐ
職人たちの姿を追う



愛知県大府市の大工組合「有司組」の有志5人(向かって左から)見立、大工、大工、大工、大工、大工。写真：大府市、左から見立、大工、大工、大工、大工、大工。



夢の教室とは…現役やOB・OGのプロスポーツ選手が「夢先生」になり、小学生に夢や仲間と協力する大切さなどを伝える。

インタビュー



頑張れば、
乗り越えられる
おがわなみ
小川奈海さん
(遠野北小6年)

夢は薬剤師になって、みんなに役立つ薬を作ることです。今日の授業で、夢に向かって頑張れば乗り越えられる気持ちになりました。



苦勞を乗り越え、
夢はかなう
おしまひるき
小島大樹君
(遠野北小6年)

夢はプロ野球選手。そのために、練習だけでなく生活面もしっかりしたいです。やっちゃん先生の話から、苦勞を乗り越えながら夢をかなえる姿が勉強になりました。

【第一章】

伝統の再興

農村の暮らしを守り続けた、
かやぶきの屋根。

近代的な暮らしと引き換えに失われた
職人の技術を、再び取り戻す
新たな取り組みが始まった。

遠野の暮らしを支えた かやぶきの技術

遠野の田園風景には欠かせない、
かやぶきの屋根。人と馬が同じ屋根
の下で暮らす遠野の曲り家はかやぶ
き屋根が特徴で、長い間、遠野の
人々の暮らしを守り続けてきた。か
やぶきのふき替えは重労働のため、
作業は地域住民がお互いに助け合
う「結い」の精神で行われ、農村部の
生活にはなくてはならない存在でも
あった。

昭和40年代の高度経済成長を経て、
遠野の農村部の生活様式も近代化。
ふき替え時期を迎えたかやぶきの住
宅は、トタンや瓦屋根の現代の住宅
へと建て替えが進み、徐々に姿を消
していった。



遠野の田園風景に、かやぶき屋根は欠
かせない。写真は青笹町の荒神社。

昔ながらの趣のあるか
やぶき屋根の姿は、今では遠野ふる
さと村や伝承園などに移築・保存さ
れている曲り家など、市内でも40棟
ほどしか見られなくなってしまった。
かやぶき屋根の減少とともに、仕事
の場を失ったかやぶき職人の技術は、
継承される機会を失っていった。

伝統技術の復活に 独自の取り組み

「市内には貴重なかやぶきの曲り
家が数多く残されているのに、遠野
からかやぶき職人がいなくなってし
まってはいけない」。――

平成8年12月、遠野高等職業訓練
校は全国でも珍しい「かやぶき科」
を設立し、かやぶき職人の養成に乗
り出した。市内の事業所から大工職
人らが集まり、十日間ほどかけてバ
ス停などのかやぶき家を新築をし
たり、かやぶき屋根の部分的な補修
をする「差しがや」を実習したりし
て、伝統技術の習得に励んだ。

かやぶき科開設当初から職人の指
導に当たったのは、市内最後のかや
ぶき職人とも呼ばれる菊池三郎さん
(71) 早瀬町。遠野の原風景で
あるかやぶきを残したい」という一
心で、長年身に付けた知識や技術を
惜しみなく伝授してきた。現在も
「遠野郷かやぶき職人グループ」を
組織し、大工職人の仲間らとかやぶ



19年から始まった「伝統かやぶき屋根
再生事業」で実践を積む訓練生（右）

きの補修に携わり、最前線で遠野の
かやぶき職人の灯をともし続ける。
そうした伝統技術の再生の取り組
みに、市も後押しをした。ふるさと
村や水光園など、市が管理する29カ
所あるかやぶき屋根の補修を進める
「伝統かやぶき屋根再生事業」を平
成19年9月から開始。この事業では、
単にかやぶき屋根の補修を進めるだ
けでなく、かやぶき科の訓練生に実
習の場を提供する目的も兼ねた。訓
練生たちは、施工する青森県の職人
たちの下で作業をしながら、かやぶ
きの技術を身に付けた。

かやぶき屋根の 「地産地消」

かやぶき屋根の材料となる「カ
ヤ」とは、ヨシやスキの植物の総
称で、「遠野のカヤ」には昔からス
キが使われてきた。曲り家1棟を
ふき替えるのにおよそ5千―6千束
のカヤが必要だが、市内に5軒ある
カヤ場ではふき替えに必要な量の2
割程度しか確保できないのが現状で、
水光園やふるさと村の曲り家のふき
替えには県外産のヨシが使われた。

遠野職業訓練協会では、良質な遠
野産のカヤを確保するため、遊休地
を借りるなどしてカヤ場の整備にも
取り組み、年々栽培面積を拡大。遠
野の職人と遠野産のカヤで作る「地
産地消」のかやぶき屋根を目指して、
さらなる取り組みが進んでいる。

かやぶきの技術は、長年の経験が頼り 元気である限り後継者を育てていきたい

市内最後のかやぶき職人

菊池三郎さん

きくち・さぶろう 71歳 早瀬町



市内の工務店で働いていた30代後半、菊池政男さん
と中居左右吉さんというかやぶき職人の棟梁の下で、
かやぶき屋根の仕事の現場代理人を務めました。当時、
すでにお二人の年齢は70代。ある日「現場を見るだけ
でなく、お前たちのような若い奴もこういう仕事も覚
えなければいけないだ」と言われ、それから二人に
教えてもらいながら、かやぶきの技術を身に付けまし
た。これまでいくつものかやぶきのふき替えや差し
がやをしてきましたが、どれも同じようにはいかない

もの。最後は長年の経験が頼りになりますが、そこま
でいくには最低でも10年はかかります。かやぶきが残
る限りは携わっていたいし、体が元気である限りは後
継者を育てていき
たいと思っています。



現在も、仲間とともに現
場でかやぶきの補修を手
掛ける三郎さん（中央）

かつてのかやぶき屋根の作業は、地
域住民がお互いに協力し合う「結い」
の制度で行われてきた
(撮影：故浦田穂一)



【第二章】

技術の結集

かやぶき職人の育成を始めて13年。伝統の技術を身に付けた職人たちは、大府市の「茅葺門」の改修に挑む。これまでの集大成の大仕事。職人の力を結集する。



9月には伝承園の水車小屋のふき替えを完成させた

遠野の伝統技術を 大府市で披露

9月22日、7人の遠野の職人たちが愛知県大府市へと向かった。目的は、同市屈指の公園・大倉公園内にある築およそ90年、前回のふき替えから30年が経過した茅葺門の改修。派遣されたのは梶原清一さん(53) 小友町Ⅱ、昆盛一さん(60) 綾織町Ⅱ、萩野光彦さん(41) 遠野町Ⅱ、菅田勝さん(29) 鶯崎町Ⅱ、菊池宏明さん(36) 附馬牛町Ⅱのかやぶき職人と、現場責任者の菊池春雄さん(52) 小友町Ⅱ、左官工の菊池盛義さん(66) 上郷町。5人のかやぶき職人は、遠野高等職業訓練校かやぶき科で、ここ数年継続して訓練を重

ねてきた職人たち。現地での改修工事は一般にも公開され、遠く離れた愛知県で遠野の伝統の技を披露する。

これまでの訓練の 成果を発揮

大府市への派遣が決まった5人の職人たちは、これまでの訓練の集大成として、今年9月におよそ1カ月かけて伝承園の水車小屋を自分たちだけで完成させた。それまでは訓練校の指導員や市外からきた業者の下で働きながらかやぶきの技術を学んできたが、これが初めての独り立ち。大府市での大仕事に向け、大きな自信と課題を得た。かやぶき科11年目を迎える梶原さ

んは、5人の職人のリーダー格。「何とか形にはできたものの、すべてが思い描いたとおりにうまくいかなかった」と作業を振り返る。

今回手掛ける大倉公園の茅葺門は、屋根頂部から両側に傾斜を持つ「切妻型」の屋根で、遠野のかやぶき屋根にみられる四方向に傾斜する「寄棟型」とは施工方法が異なる。伝承園の水車小屋の施工を終えた5人は早速、大倉公園のかやぶき屋根に見立てた屋根を職業訓練校内に作り、特訓を重ねた。

萩野さんは「これまでとやり方が異なる上、遠方での長期にわたる仕事。初めての試験だが、遠野の名に恥じない、いい一歩を踏み出した」と決意を語る。



◎大倉公園 茅葺門

およそ1.7%の広さを誇る大府市屈指の公園。大正時代に作られた園内には、緑の木々、池などをめぐる散策路があるほか、2,800株のツツジをはじめ、アジサイ、ツバキ、フジなど四季折々の美しい花が咲き、市民の憩いの場となっている。茅葺門は大正10年に建築、昭和54年にふき替えされた。

土地の歴史や風土を感じるかやぶき。 遠野のものは自分たちが手掛けたい。

かやも1本1本、みな微妙に形が違い、その特徴に合わせて想像力や応用力、経験を生かしてふいていくのがかやぶきの技術。それが、頭で思い描いた通りにはなかなかうまくいかない奥深さがあります。安定しない屋根の上での立ち仕事の連続は、足にまめやたこができ、腰にも負担が掛かるなど大変なもの。大工職人として40年近く仕事をしてきましたが、これまでで一番技術と体力のいる仕事なのではないかと感じています。

伝承園の水車小屋を初めて訓練生だけで手掛けましたが、「本当にうまくいくのか」と胃

が痛む毎日でした。自分たちで手掛けることの大変さ、失敗が許されない重圧を感じました。

かやぶきには、その土地の歴史や風土性を感じます。それゆえ、どれも一律な作り方ではなく、その土地に合わせた作り方が必要です。地元にいる職人としては、遠野に数多く残るかやぶき屋根を、自分たちだけで手掛けられるようになるのが理想です。そして、この経験を後進にも伝えていかなければと思っています。

大府市では、今まで習得してきたことをしっかりと発揮してきたいと思います。



かやぶき科11年目のベテラン
梶原清一さん

材料も道具もすべて自然にあるもの。 昔の人の知恵と技術には驚かされる。

会社からの勧めもあり、「なかなか携われるものでもないの、やってみるか」という軽い気持ちで取り組み始めたのきっかけです。

材料も使う道具もすべて自然にあるものだけを使い、素材のしなりや動きをうまく利用して仕上げるかやぶきの屋根。昔の人の知恵と技術には驚かされます。また、同じかやぶき屋根でもその地方によっても作り方が異なります。とまどう部分もありますが、いい部分をいかに自分のものにできるかが大事だと思っています。

伝承園の水車小屋を初めて自

分たちだけで完成させることはできましたが、まだまだ満足できる状態ではありません。かやぶきは、いわば設計図がないのと同じ。カヤの癖を見ながらその場その場で考えて作りあげられるよう、もっと経験を積み重ねなければいけません。

今は、この仕事に携われることにやりがいを感じています。普段の大工仕事もそうですが、納得がいく仕事ができなければ本当の「職人」だとは言えません。これまで学んできたことを、しっかりと形に残せるよう、大府市では納得できる仕事をしたしたいと思います。



最年少のかやぶき職人
菅田勝さん



出発の前に職人を代表して決意を語る梶原清一さん

職人の技術が一度途絶えてしまったら、復活するのは容易ではない。

【第三章】 継承の意義

職人たちを支え続ける市内の事業所と、職業訓練校の代表者に、伝統の技術を継承する大切さや意義を聞いた。

かやぶきの技術への思い

当社の職人、梶原清一さんには「将来は社員の先頭に立って指導してもらいからな」と、かやぶき科に送り出しました。当社は全部で25人の従業員。近年のご時勢だけに、一人の職人も貴重な人材です。正直なところは、どこの事業所もかやぶきの訓練に送り出すのは大変です。それでも、皆、かやぶきの技術を残しておかなければいけないという思いでやってきました。

縄をどの程度の強さで縛るのがいいのかなど、かやぶきの技術は職人が経験から体で覚えているもの。現代の建築にはさまざまなマニュアルや計算式がありますが、そればかりに頼らず、自らの経験と勘を生かすのも職人の基本であり、大切な部分です。しかし、職人の体が覚えているものだけに、放っておけばそのまま途絶えてしまう技術でもあります。その職人がいなくなってしまうから復活させるのは容易ではありません。「かやぶき科」のように、伝統技

術を受け継ぐ仕組みは大切だと感じています。

今後もより多くの経験を

良い仕事は、自信がなければできません。工法が違うなど大変な部分もあると思いますが、今回の大府市での仕事を立派に仕上げ、みんなに認められることで大きな自信につながるはず。職人は生涯勉強。いろいろな地方のいいやり方を見て、それを自分の技術にしていけたらいいと思います。大工職人ですら一人前の職人になるには6〜7年は掛かるもの。かやぶき科の5人が、一人前のかやぶき職人になるには、まだまだこれからです。

今後も、我々事業所としては遠野の職人に多くの仕事を経験させて、さらに腕に磨きをかけさせたいと思います。やがてはこの5人が会社の柱を越えて協力し合い、さらに若いかやぶき職人を育てながら、伝統の技術を受け継いでいければいいと思います。



菊栄工務店 社長
菊池栄喜さん 67歳 小友町

職人育成に一つの手こたえ

全国でもあまり例を見ない「かやぶき科」を13年前に立ち上げ、かやぶき職人の育成に取り掛かったものの、年に数回の短期訓練の上、事業所の都合で毎回参加者が変わる状況で、なかなか職人が育たない状況が続いてきました。

指導する職人も年を重ねてきており、このままではいつまでたっても一人前の職人が育たないと、事業所にも固定した職人を参加させるよう協力を要請してきました。市内の事業所の皆さんには、本当にいろいろと協力していただきました。

それまでの訓練では、差しがやや小規模のかやぶきしか手掛けてきませんでした。市のかやぶき屋根再生事業に参加させてもらうことで、より多くの経験を積むこともできました。

かやぶきの屋根は、その土地によって形もふき方も違うもの。かやぶき職人の技術は、地域の文化を後世に伝える大事な仕事です。まだ遠

野に残る多くのかやぶき屋根を、遠野の材料と遠野の職人で手掛けることができるよう、一人前のかやぶき職人の育成が急がれています。現在、「かやぶき職人」として認定する技能認定資格の創設を検討しています。5人が育ったこれまでの過程を基に、ぜひ遠野の「かやぶき科」から発信したいと考えています。

遠野の文化を守る職人に

大府市での仕事が決まってからは、職人たちの目の色も変わりました。今までは誰かに頼ってこれましたが、ここからは自分たちでやらなければという意気込みを感じました。本気になって自ら研さんを積まないと、技術は身に付きません。大府市での仕事は、彼らにとって訓練でもあり、技術を自分のものにするいいきっかけにもなったと思います。

これまで受け継がれてきた遠野の大切な文化を守るかやぶき職人として、さらに成長してくれることを願っています。



遠野職業訓練協会 会長
(遠野高等職業訓練校 校長)
佐藤和治さん 79歳 松崎町

取材を終えて

「遠野のかやぶき職人」として、大府市でのふき替え作業に向かった5人。これまで身に付けた伝統の技術をいかんなく発揮しようとする姿は、遠野の伝統を受け継ぐ職人そのもの。

遠野の暮らしには、かやぶき屋根だけではなく伝統の芸能や伝統の食、そして語り継がれる昔話の数々など、先人たちが受け継いできた多くの伝統の技術が今も大切に残っている。現代のように物質的に豊かではなかった時代に、知恵と工夫と力を結集して心豊かに生きてきた先人たちの暮らし。そうした人々の心こそが、遠野の本来の魅力ではないだろうか。これまで大切に受け継がれてきた伝統の技術を受け継ぐのも、途絶えさせるのも今を生きるわたしたち次第。このまちをかたちづくる一人として、まだ多く残されている遠野の伝統の魅力やその価値に、もっともっと目を向けてみたい。

特集 職人の挑戦 終わり

かやぶき職人の技術は、地域の文化を後世に伝える大切な仕事。